家庭とくらし

コドモ オトナ

以上 未満 11

「付き合い」どう学ぶ

先月中旬の土曜日の朝、川崎市内の小学校に数人の男性が集まった。全員がおそろいのオレンジ色のベスト姿。同市の会社員山上伸さん(44)が「じゃ、始めましょう」と声をかけ、校門近くで植栽の枝打ち作業が始まった。

二人の息子が同小に通う山上さんは三年前からPTA会長を務めている。ただでさえなり手がいないPTAの役員で、男性会社員は珍しい。二年で交代するつもりが、後任が見つからず、今春までの「三期」に延びた。「だれかがやらないと組織は成り立ちませんから。でも、付き合いは広がったし、よかった」

これまで、マンションの管理組合理事長や自治会の役員も引き受けてきた。集団の和を重んじ、地域の付き合いも欠かさない山上さんをだれもが「あの人は大人だ」と言う。

◇

生命保険文化センター(東京)が定期的に行っている「日本人の生活価値観」調査の一九九六年のリポートによると、集団の和を大事にする考え方を支持する割合は八五年の58%から50%に減り、地域活動への関心はすべての年代で低くなった。

同センター生活研究部課長の長井毅さんは「価値観の多様化に加え、不況や雇用不安もあって、大人たちは年々自分のことしか考えられなくなり、自分を抑えて周囲に配慮する『大人の態度』を見せる余裕もなくなった」と見る。結果的に、子どもは集団の中での人との付き合い方や距離の取り方を学ぶ機会を失う。

◇

「他者や地域とかかわるのは、実は面白くて心地よい。ボランティアは子どもらがそれを知るいいチャンス。社会のさまざまな人々とのかかわりによって自分が生きていることを実感できる」。若い世代の体験をサポートする大阪ボランティア協会事務局次長の名賀亨さんは、子どもたちの意識に希望を見いだす。

同協会では年二回、高校生が大学生スタッフとともに、知的障害者の施設に五日間泊まり込むワークキャンプを開き、施設内の整備や障害者らの介助を行う。毎年、参加者の何人かはスタッフとして活動を続ける。その一人の永島健志さん(18)は、「相手の立場で物事を考えリードしてくれる、自分より少し大人の存在にあこがれた」と話す。

岡山県倉敷市の高校二年生千先翔子(せんさきしょうこ)さん(17)も、一年生の時に「人と違うことがしたい」と、AMDA(アジア医師連絡協議会=本部・岡山市)の「高校生会」に参加した。昨年三月には、募金などで資金を集めて再建を支援したカンボジアの小学校を仲間と訪れ、現地の人々の喜びあふれる笑顔に迎えられた。

「胸がいっぱいになった。学校以外の友達や大人との付き合いも増えて、社会で何ができるかを考えられた」

◇

子どもたちに「大人の態度」を見せ、自分以外の人に配慮することで得られる喜びをどう伝えていくのか。長井さんは「時代は変わっても大切なこと」と話している。

ボランティアで意識育てる

途上国支援の資金集めをする千先さん(中央)らAMDA高校生会のメンバー(昨年12月、岡山市内で)